様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：１１１０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2013
課題番号：２３６５２１２７

研究課題名（和文）青森県の小学校に二つの外国語を導入するための予備的調査研究

研究課題名（英文）Preparatory survey on introducing two foreign language study to elementary school children in Aomori

研究代表者
奥野　浩子（Okuno, Koko）

弘前大学・人文学部・教授

研究者番号：８０１６０８１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,500,000円、（間接経費）　750,000円

研究成果の概要（和文）：　ソウル日本人学校と東京韓国学校の、二つの外国語（英語＋韓国語/日本語）学習・指導の実態を、３年生児童と５年生児童および外国語担当教師を対象に、アンケートと聞き取り調査を実施した結果、小学生でも「二つの外国語を習うのがいい」という回答が60～70%と、複数の外国語を学ぶことに抵抗がないことが分かった。また、「日本の小学校で英語に加えて韓国語を教えること」について、外国語担当教師のほぼ全員が賛成であった。生活しながら現地語として、韓国語や日本語を学ぶ調査協力校とは環境の違いがあるが、韓国との交流が盛んな地域がある青森県でも、小学生に英語学習とリンクさせるような韓国語学習の導入は可能である。

研究成果の概要（英文）：A questionaire survey on studying/teaching two foreign languages was conducted for the 3rd and 5th graders, and foreign language teachers at Japanese School in Seoul and Tokyo Korean School. About 60-70% of the pupils answered "it's better to learn two foreign laguages." To the question about "teaching Korean in addition to English in Japanese elementary school", almost all the teachers of foreign languages answered "it's good".
There sure is a difference between the elementary school children of the two school surveyed and those in Aomori, Aomori prefecture has a lot of areas where people are earnest about exchange with Korea, so elementary school children in Aomori are sure to enjoy Korean language study as well as English language study.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：小学生　英語学習　韓国語学習　二つの外国語学習

１．研究開始当初の背景

日本語と英語は違いが大きいが、韓国語は日本語と似ている点と英語に似ている点を併せ持っている。日本語との親疎を考えると、韓国語の方が英語より日本語に近いので、英語を学ぶ前に韓国語を学ぶ、あるいは、英語と韓国語を同時に学ぶと効果的ではないかと考えるようになった。特に、青森県の状況を考えると、小学生のうちから英語と韓国語を学習する手立てを考える必要を感じた。

２．研究の目的

日本語と英語と韓国語という三言語を学ぶ環境にあるソウル日本人学校と、東京韓国学校の、複数外国語学習・指導の実態を調査し、青森県内の小学校に、効果的なトリリンガル学習・教育を導入するための具体的な方策を探ろうと思った。

３．研究の方法

(1)二つの外国語学習・教育の現場での実態調査が中心で、調査協力校の小学生と外国語担当教師にアンケートと聞き取り調査を実施した。

アンケートには、ソウル日本人学校(以下、ソウルとする)では、３年生６８名、５年生４２名と、外国語担当教師７名から、東京韓国学校(以下、東京とする)では、３年生９１名、５年生９５名と外国語担当教師２７名から回答を得ることができた。

聞き取り調査は、時間の制約から、ソウル日本人学校５年生全員、東京韓国学校では５年生のうち２３名、外国語担当教師は両校の３４名全員に実施した。

(2)　児童対象のアンケート質問項目は、児童の属性や言語生活について１１項目と、外国語学習について９項目であった。属性と言語生活については、①性別、②出生国、③現在の居住地以外の外国での生活経験、④英語学習の開始時期、⑤韓国語あるいは日本語の学習開始時期、⑥父親と話すときの使用言語、⑦母親と話す時の使用言語、⑧両親以外の家族と話すときの使用言語、⑨友だちと話す時の使用言語、⑩日常生活での使用言語、⑪読み書きの使用言語であった。外国語学習については、①英語の学習は楽しいか、②韓国語あるいは日本語の学習は楽しいか、③英語の学習は「簡単」か「難しい」か、④韓国語の学習は「簡単」か「難しい」か、⑤英語と韓国語あるいは日本語の両方を習うことをどう思うか、⑥英語の学習で楽しいもの・好きなもの、⑦韓国語あるいは日本語の学習で楽しいもの・好きなもの、⑧いま住んでいる韓国あるいは日本のどんなことに興味があるか、⑨韓国あるいは日本から別の国に行っても、韓国語あるいは日本語の学習を続けるか、であった。

集計は、それぞれの質問についての単純集計と、二つの質問項目についてのクロス集計を行った。

(3)　教師対象のアンケート質問項目は、①担当する外国語が母語かどうか、②担当外国語の指導年数、③現任校での指導年数、④４技能を指導する際の難しさの順序、⑤外国語を二つ学ぶ必要があるかどうか、⑥担当外国語の授業時数が適切かどうか、であった。

(4)　児童対象の聞き取り調査項目は、①母語と英語の類似点と相違点、②母語と韓国語・日本語との類似点と相違点、③授業以外で英語を使う場面、④授業以外で韓国語・日本語を使う場面，⑤よく使う英語の表現、⑥よく使う韓国語・日本語の表現であった。

(5)　教師対象の聞き取り調査項目は、①外国語の指導で困っていること、②外国語を教えていてよかったと思うこと、③児童の母語の干渉があるか、あるなら、どんなことか、④日本の小学校で英語に加えて韓国語を教えることをどう思うか、⑤日本の小学校で英語と韓国語を教える際のアドバイス、⑥もう一つの外国語の担当教師と協力し合っていること、であった。

４．研究成果

この調査により、以下のことが明らかになった。学校名は、ソウル日本人学校を「ソウル」と、東京韓国学校を「東京」と略記することにする。番号は質問項目の番号に対応し、二つの番号は二つの質問項目のクロス集計を表す。

(1)　児童へのアンケート調査結果

<u>属性と言語生活</u>

①　男女比：ソウルは６対４で、東京は５対５の割合であった。

②　出生国：ソウルは 78.2%が日本、16.4%が韓国､その他は5.4%であった｡東京は62.4%が韓国、33.9%が日本、その他は 1.6%でああった。

③　外国での生活経験：ソウル３年生は７つの国・地域に延べ９名、ソウル５年生は７つの国・地域に延べ７名が韓国以外の外国での生活経験を持っている｡東京では､韓国を「外国」と捉えた回答が多く見られたが、これは「出生国以外の国」を外国と捉えたものと思われる。東京３年生は６つの国・地域に延べ５１名（うち韓国が４１名)、東京５年生は１１の国・地域に延べ６２名（うち韓国が４２名）であった。

④　英語学習歴：ソウルでは３年生も５年生も、１年未満から７年、東京では３年生で１年未満から８年、５年生で１年未満から１０年と、両校とも両学年とも、かなりのばらつきがみられる。両校とも、途中での転入が多いことが反映されていると思われる。

⑤　韓国語・日本語学習歴：ソウル３年生の韓国語学習歴は１年未満から９年、ソウル５

年生では１年未満から７年であり、東京３年生の日本語学習歴は１年未満から８年、東京５年生では１年未満から１０年と、こちらも英語学習歴と同様、かなりのばらつきがある。
⑥～⑪　日常の使用言語：ソウルでは、３年生も５年生も家庭での使用言語が日本語という児童が 80%以上、日常生活での使用言語が日本語という児童は３年生では約 75%、５年生では約 90%と、大多数が日本語使用ではあるが、友だちとは日本語と現地語である韓国語の併用が、３年生では 11.6%、５年生では 28.6%である。東京では、家庭での使用言語が韓国語という児童は、３年生では約 60%、５年生では約 70%であり、家庭での使用言語が日本語という児童が３年生も５年生も約 15%である。ソウルと異なり、東京の在学児童の日本滞留資格が、「永住」、「定住」、「一字滞留」などと多様であることが反映されていると思われる。

<u>外国語学習</u>
①　英語学習の楽しさ：「とても楽しい」と「少しは楽しい」を合わせて、ソウル３年生は 94%、ソウル５年生は 95%、東京３年生は 95%、東京５年生は 85%と、大多数が英語の学習を楽しいと感じている。
②　韓国語・日本語学習の楽しさ：韓国語学習の楽しさについて、ソウル３年生は 88%、ソウル５年生は 81%が「楽しい」と回答した。日本語学習の楽しさについては、東京３年生が 56%、東京５年生が 58%と、英語学習に比べて楽しいと感じる生徒の割合が低い。英語と日本語で大きな差が生じたのは、その授業内容に関係があると思われる。英語の授業は Language Arts という英語そのものを学ぶ他に、イマージョンとして他の教科も英語で学んでいるのに対して、日本語の授業では、日本の「国語」の教科書を使用している。日本の小学生用に作られた教科書での学習は、特に編入して来た生徒には負担に感じられることが推定できる。
③　英語学習の難易：「少し難しい」と「かなり難しい」を合わせると、ソウル３年生は 38%、ソウル５年生は 38%であり、東京３年生は 35%、東京５年生は 26%である。両校とも、難易の感じ方は多様であるが、英語学習歴の多様さを考えると当然かもしれない。
④　韓国語・日本語学習の難易：韓国語学習について「難しい」と感じるソウル３年生は 38%、ソウル５年生は 31%である。日本語学習を「難しい」と感じる東京３年生は 42%、東京５年生は 32%と、英語と同様、学習歴の多様さが反映されている。
①③　英語学習の「楽しさ」と「難易」：ソル３年生だけは「楽しさ」と「難易」に相関が見られないが、ソウル５年生、東京３年生、東京５年生には相関がみられた。
②④　韓国語・日本語学習の「楽しさ」と「難易」：韓国語学習の「楽しさ」と「難易」に、ソウル３年生は相関が見られるが、ソウル５年生には相関がみられない。日本語学習の「楽しさ」と「難易」には、東京３年生も東京５年生も相関がある。
①②　英語学習の「楽しさ」と韓国語・日本語学習の「楽しさ」：英語学習の「楽しさ」と韓国語学習の「楽しさ」では、ソウル３年生には相関がなく、ソウル５年生には相関がある。英語学習の「楽しさ」と日本語学習の「楽しさ」では、東京３年生も東京５年生も相関は見られない。
③④　英語学習の「難易」と韓国語・日本語学習の「難易」：二つの外国語学習の「難易」には、ソウルも東京も、どちらの学年でも相関はみられない。
⑤　二つの外国語学習：二つの外国語を習うことについて、「両方習うのがいい」という回答は、ソウル３年生は 69%、ソウル５年生は 74%、東京３年生は 56%、東京 5 年生は 62%であった。「英語だけ」と「韓国語・日本語だけ」という「外国語は一つでいい」回答は、ソウル 3 年生は 26%、ソウル 5 年生は 19%、東京 3 年生は 35%、東京５年生は 22%であった。ほぼ６～７割が二つの外国語学習に抵抗がないようである。
①⑤　英語学習の「楽しさ」と二外国語学習：両校の両学年とも、英語学習が「楽しい」と感じる児童は「両方習うのがいい」と考える傾向が見られる。
③⑤　英語学習の「難易」と二外国語学習：両校の両学年とも、英語学習と「難易」と「両方習うのがいい」には関連が見られない。
②⑤　韓国語・日本語学習の「楽しさ」と二外国語学習：英語の場合と同様、両校の両学年とも、もう一つの外国語学習の「楽しさ」と「両方習うのがいい」には関連がある。
④⑤　韓国語・日本語学習の「難易」と二外国語学習：ここでも英語の場合と同様、「難易」と「両方習うのがいい」には関連が見られない。
⑥　英語学習で楽しいこと・好きなこと：上位の回答は、ソウル 3 年生では「会話」と「歌」、ソウル 5 年生では「会話」、東京 3 年生では「歌」、東京 5 年生では「書くこと」と「会話」であった。
⑦　韓国語・日本語学習で楽しいこと・好きなこと：上位回答は、ソウル３年生では「歌」と「会話」と「書くこと」、ソウル 5 年生では「会話」と「書くこと」、東京３年生では「絵本」と「書くこと」、東京 5 年生では「書くこと」と「会話」であった。
⑧　韓国・日本で興味のあること：現在生活している国についての興味は、ソウル３年生では「食べ物」と「乗り物」、ソウル５年生では「食べ物」と「ものの値段」、東京３年生では「映画」と「食べ物」、東京５年生では「食べ物」と「映画」であった。両校の両学年とも現地の「食べ物」に興味を示した。
⑨　現地を離れてからの韓国語・日本語の学習継続：「ぜひ続けたい」と「できれば続けたい」を合わせて。ソウル３年生は 80%、ソ

ウル５年生は 72%、東京３年生は 55%、東京５年生は 57%であった。ソウルの韓国語学習継続意志の割合が東京の日本語学習継続意志の割合より高い。
②⑨　韓国語・日本語学習の「楽しさ」と「学習継続意志」：両校の両学年とも、「楽しさ」と「学習継続意志」には強い相関が見られた。
④⑨　韓国語・日本語学習の「難易」と「学習継続意志」：ソウル３年生では両者に高い相関があり、東京３年生と東京５年生では少し相関が見られたが、ソウル５年生には相関がなかった。

以上をまとめると、小学生の外国語学習のキーワードは「難易」ではなく「楽しさ」であることがわかる。外国語の授業で楽しいことや好きなことも答えてもらったが、「会話」、「歌」、「書くこと」、「発表」が上位を占めた。このことから、小学生が楽しいと感じることは「自らその言葉を発する」ことであるとまとめることができる。

(2)　児童への聞き取り調査結果
ソウル５年生４２名と東京５年生２３名に対して、事前に質問項目を示すことなく口頭で回答してもらった。時間の制約があり、十分に考える時間を与えることができなかったので、無回答や「わからない」という回答も多かったが、得られた回答から以下のことが明らかになった。
①　児童の母語と英語との類似点について、ソウルでは９名が「外来語」をあげた。東京では、ほとんど回答がなかった。
②　韓国語と日本語の類似点として、「漢字語」という回答をソウルで１７名、東京で６名から得た。「語順」は、ソウルで９名、東京で２名いた。
③　母語と英語の相違点として、「語順」をソウルで２４名、東京で３名があげた。「発音や抑揚」は、ソウルで１４名、東京で３名があげた。
④　韓国語と日本語の相違点については、ソウルで１９名が「発音」をあげたが、東京ではこの回答がなかった。音声面では、韓国語の方が日本語より種類が多いので、日本人学習者の方が気づきやすい点である。東京では「文字」という回答が４名からあった。ハングル１種類の韓国語と、漢字、ひらがな、カタカナと３種類の文字をもつ日本語との大きな違いである。
⑤　授業以外での英語使用場面について最も多かったのは、ソウルでは「塾や個人教授」が１６名、東京では「家族や友だち」が１１名であった。
⑥　授業以外での韓国語・日本語使用場面で最も多かった回答は、ソウルでは「外出先や買い物」が２４名、東京では「家族や友だち」が１８名であった。

(3)　教師へのアンケート調査結果
①　担当外国語が母語かどうか：３４名中２１名が母語であったが、母語でない場合でも全員がその言語使用圏での生活経験があり、その期間は最短で３年、最長で３０年である。
②　担当外国語の指導年数：最短で１年半、最長では２８年である。
③　現任校での指導年数：最短で１カ月、最長で１６年である。
④　４技能の指導難易：「話す」「書く」「聞く」「読む」の４技能について指導の難しい順に並べてもらったが、回答はまちまちであった。ただ、「話す」「聞く」という「音声言語」の指導が、「書く」「読む」という「文字言語」より指導が難しいと考える教師が多い。
⑤　二つの外国語を学ぶ必要性：「とても必要」と「必要」を合わせると３４名中２５名であった。その理由として、７つの選択肢から複数選んでもらったが、最も多かったのは「多角的な視野が持てる」と「言語や文化の多様性を認識できる」で、ともに２５名が選んだ回答である。

(4)　教師への聞き取り調査結果
①　外国語の指導で困っていること：合わせて４５件の回答が得られた。その内容は、教育環境１６件、授業内容１２件、レベル差７件、モチベーション６件、カリキュラム４件であった。
②　外国語を教えていてよかったこと：４９件の回答のうち、大多数の３９件が「生徒の成長」に関するもの、６件が「教師自身の成長」に関するものであった。
③　母語の干渉：３０名から６１件の回答を得た。その内容は、文法や文構造に関すること２７件、発音に関すること１７件、表記に関すること６件などであった。
④　日本の小学校で英語に加えて韓国語を教えることについて：３４名全員から回答を得た。賛成２１名(61.8%)、条件付き賛成１１名(32.3%)、反対２名(5.9%)であった。
⑤　日本の小学校で韓国語を教える際のアドバイス：３０名から４１件の回答があった。「授業内容」に関しては、児童が興味を持ちそうな内容を「楽しく」教えることや、発音重視でというものである。他に、「指導方法・指導者」、「カリキュラム」、「開始時期・対象」についてのアドバイスがあった。

(5)　開催した公開研究会
①　平成２５年２月１６日、青森県や青森市などの後援を得て、青森市民ホールで、公開研究会「外国語教育と地域活性」を開き、青森県の韓国に対する取り組み、青森南高校での英語とロシア語という二つの外国語教育についての講話と、国際交流関係団体や青森市国際交流員など５名のコメンテーターも交えて意見交換を行った。
②　平成２５年６月２２日、青森県教育委員会や弘前市教育委員会などの後援を得て、公開研究会「小学生からの外国語学習を効果的

にするには？」を開き、二校での調査結果の報告と、ゲストスピーカーを招いて、ソウル日本人学校の外国語教育の実態、韓国の小学校の外国語学習の実態、弘前市の小学生対象の韓国(語)講座の様子を話してもらった後、質疑応答を行った。小学校教員や教育委員会関係者などが参加して活発な意見交換となった。

(6)　調査結果の公表

平成２６年２月、調査の集計結果を中心に、上記①,②の研究会での配布資料のほか、意見交換・質疑応答部分を含めて『青森県の小学生への韓国語学習導入の可能性を探る』という１８９ページの冊子にまとめ、２００部印刷し、調査協力校の他、青森県内外の研究者と教育関係者に送付した。児童への調査結果は、日本語と英語と韓国語の３カ国語で表わした。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
① 奥野　浩子、多田　恵実、ほか６名、小学校で外国語を担当する教師の思い、弘前大学人文学部『人文社会論叢』,査読無、第２９号、2013、1-15
② 奥野　浩子、多田　恵実、青森の小学校英語と韓国の小学校英語、弘前大学人文学部『人文社会論叢』、査読無、第２７号、2012、1-9

〔学会発表〕（計２件）
① 多田　恵実、奥野　浩子、小学校児童の2ヶ国語を使った英語教育、第１３回小学校英語教育学会沖縄大会、平成２５年７月１４日、琉球大学
② 多田　恵実、青森の小学校英語と韓国の小学校英語、第１１回小学校英語教育学会大阪大会、平成２３年７月１８日、大坂教育大学

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
奥野　浩子　（OKUNO, Koko）
弘前大学・人文学部・教授
研究者番号：８０１６０８１０

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
多田　恵実　（TADA, Megumi）
弘前大学・国際教育センター・講師
研究者番号：　６０３８１２９０